無涯塾資料１４

心気力・懸待・事理［川島次郎記録帳］

心気力一致

・心　―　精神活動の静的方面を言う「知覚し、判断するは心なり」
　　心は水の如き静的なもの　心は将
・気　―　心の判断によって意思の決行を補助する「気は心の兵卒なり」
　　気は風の如く動的なもの　気は卒・間者・斥候
・力　―　技・技術　「力は、心と気の相合うところに従って」
　　力は波のようなもの　　力は軍隊
・眼に見、耳に聴く所直ちに精神の動となり、精神の動によって咄嗟（とっさ）に技術に現われ円滑迅速な撃突
・気剣体　―　心形刀　―　心気体

懸待一致

・「攻中に守あり」とは兵家の金言なり
・交（かわ）わすも・張るも・外すも・切り落とすも・受け流すも・捲き落すも・同時に斬る太刀突く太刀でなければならない　一拍子となることである
・懸中待　―　待中懸　　初心者は打つ、受けが別々になる
・受けようと思うな打つと思え
・石火の位　―　間髪を入れず
・偏陽　―　偏陰　　打つは陽・留まるは陰　要は懸に非ず・待に非ず

水月の位

・月は浮かぶ心無く　水は月を浮かべる心無く
・映るとも　月も思わず映すとも　水も思わぬ　猿沢の池
・月無心にして水に映り　水無心にして月を写す
・柳生光厳が小野忠明に向って「公の術は水月の如く、吾が太刀を打ち出すところが無い」
・柳生宗矩が庭前の桜花に見とれ、小姓の殺気を感ず
・敵に心生ずれば吾が明らかな本体に悉（ことごと）く映写する如し

無念無想

・吾が心身の働きが無碍自在となる
・敵の動静鏡に照らす如く明らかに見える
・吾が動作の起こりを敵が窺い知る事が出来ぬ
・武士の心の鏡曇らば　立ち会う敵うつし知るべし
・思いなく巧みもあらぬ夢想には　虎さえ爪の置き所なし
・盲者某が琵琶を学んで京都に行き検校の官を拝した。帰途箱根の山中にて多数の狼来たり近づいた。死を覚悟して一曲を弾じた処、害を加える事無く散じた。無心無欲には争うものなく、敵するものもなし

止　心

・注意が有る一物に奪われ　―　他は虚
・心は常に河の流れの如く
・一物来たり　―　一物去るも　―　影留める事無く　―　次に来る者に直ちに心を移さねばならない
・一本の木に何の心なく向ひ候はば数多の葉残らず目に見え候　―　葉ひとつに心とられ候ば　―　残りの葉見えず
・沢庵和尚　柳生宗矩に問ふて曰く「剣交わる時心を何れに置くや」
　「敵の剣尖に」　―　「剣尖に心奪はる」
　「吾が剣尖に」　―　「我党に心奪はる」
　「丹田に」　―　「丹田に心奪はる」
　「心何れに置く事なかれ　何れにも置かざれば　何れとして心ならざるはなし」

明鏡止水

・敵に対すれば何人にも負けまい　―　勝ったらどうする心生ずる也　―ひとつの故障也
・思慮分別は戦わぬ前のことで　―　戦に臨んでこの念起るは負けの基である
・明鏡止水　一切の思慮を捨てて　―　妄想や雑念の為　―　決して心を曇らせぬ事
　心を明鏡の如く磨き澄まして　―　機会の来る時は電光石火の如く敵も我も知らず
・人は夢寝の間にも、足の痒いのに頭を掻くものでは無い　―　足が痒ければ足　―　頭が痒ければ頭　―　人間自らの機能があって害を防ぎ得る様に出来て居る
・打たんとするは虚であって　―　防がんとするは人間の本能実である

剣の四戒

・驚（きょう） ― 懼（ぐ） ― 疑（ぎ） ― 惑（わく）　　＊桜花の散る如く―――禍転じて福と為す

驚　・予期しない敵の動作に驚く　―　声に驚く

　　・正当なる判断　―　適当なる処置を失い　―　茫然自失する

懼　・恐怖の念

　　・精神活動滞り　―　蒼くなる　―　手足震え　―其の働き失ふものなり

疑　・心に決断が突かない　―　敏速を欠く

惑　・精神が昏迷し　―敏速な判断・軽快な動作が出来ない

事理一致

理　・理とは理論　　―　行の筋である

事　・事とは業［技］　―　手足身体の動きである

・技を行うものは**理**也

・**理**を心に得て　―　手足身体に及ぼす

・**事**の外に**理**なく**理**のほかに**事**なし

・如何に**理**に明るくとも、心を技を鍛えない時には疑念生じ十分に応じ難し

・根本を知らずして業だけに熟したりとも「狼戻暴戦（ろうれいぼうせん）」にして剣法に非ず

・**理**は根也　―　**事**は枝葉也　―　根本明らかなる時は枝葉随って繁茂する